# HALだより 秋

Hokkaido
Agricultural Laboratory
for Business Development

Vol. 13
2008.Autumn

北海道農業の未来を拓く広報誌

Agricultural Award

## 第4回 HAL農業賞

HAL BUSINESS REPORT #1

## 有機農産物の海外流通への取り組み

HAL BUSINESS REPORT #2

## 「北海道蕎麦はるや」リニューアルオープン

http://www.hal.or.jp

The Fellowship

## 農業経営モデル紹介 メンバーズ・インタビュー

有限会社 夢がいっぱい牧場
代表取締役 片岡文洋氏

## From北海道農業法人協会

北海道農業法人協会活動報告
酪農生産者ネットワーク発足

HAL Hokkaido Agricultural Laboratory for Business Development

MSA-ES-609 JAB CM024


HALだより 秋 Vol.13

発行日 2008年11月25日発行（通巻13号）

発行 財団法人北海道農業企業化研究所 企画業務部門 広報普及部
〒061-0600 北海道恵庭市黄金町オサツナイ315番地118
TEL 0125-67-3333 FAX 0125-67-3322

編集協力 北海道農業会議
〒060-0001 北海道札幌市中央区北1条西7丁目プレスト1・7ビル
TEL 011-281-6761 FAX 011-281-6764

編集責任者 大沼 康介


## 農業生産者のための 北海道『食』商談会 in十勝

農業生産者と流通業者の相互理解を深めてビジネスチャンスの拡大を図る商談会が、北海道銀行の主催で行われました。通常、バイヤーを集めての商談会は札幌など都市部で行われていますが、このイベントは、生産地に大手小売店、百貨店、外食産業などのバイヤーを招き、さまざまな角度から農産物を評価していただくという画期的なものでした。

バイヤーの方からは「農業者側に差別化が必要。戦略をもって売らないと伝わらない」「加工品は衛生面の条件をクリアしてほしい」といった厳しい意見もありましたが、「今までなかなかこのような機会がなく非常に勉強になった」「新たな食材を見出す良い機会となったので、今後も続けて欲しい」「他の地区にも波及させて欲しい」と、イベントを評価する声が聞かれました。

参加した農業生産者からは「こだわりや商品の優位性をアピールする場にもつながり、また生産現場と経営実態の厳しさも理解していただくことができた」「バイヤーのアドバイスを通じて自分たちが取り組む優先課題を理解できた」という感想がありました。

商談会終了後、現在までに5件の商談が成立し、さらに5件の商談が進行しているなど、実り多いイベントとなりました。

### 現地視察

開催場所：十勝管内の各農業法人
開催日時：平成20年8月19日（火）9:30～16:00・20日（水）8:30～17:00

### 商談会・セミナー

開催場所：北海道ホテル（帯広市西7条南19丁目1）
開催日時：平成20年8月19日（火）
17:00～18:20 マーケティングセミナー
講　師 内田勝則氏（東急百貨店バイヤー）
テーマ　「これから求められる農業者のマーケティング」
18:30～20:00　商談会（名刺交換会）
開催形態：地域連携拠点事業（経済産業省）

主　催　北海道銀行
協　力　財団法人北海道農業企業化研究所、社団法人セルフサービス協会、北海道、十勝支庁、農林漁業金融公庫北海道支店（現日本政策金融公庫）、道銀・日経ベンチャー経営者クラブ
参加者　農業者（33社）48名、バイヤー（18社）23名、協力機関6機関15名、他




PRINTED WITH SOYINK R100
資源の保護と環境への配慮を考え、本紙には古紙100%再生紙、インクは大豆油インキを使用しています。

# 第４回 HAL農業賞

Agricultural Award

受賞者紹介

HAL農業賞は、北海道各地で地域農業を支え独創的な経営を行い、生産技術の向上や加工・流通といった新しい分野への事業展開を行っている法人、そしてその活動を指導・支援、あるいはビジネスの拡大に役立つビジネスの研究をおこなっている個人や団体に贈られる賞です。表彰は経営部門、指導・支援部門、研究部門の3部門があり、この中から特にすぐれた企業や団体に神内大賞が贈られます。

## 第4回HAL農業賞選考経過

本年は、経営的視点で推薦された12団体がノミネートされました。現地調査・内部審査を経て、4名の外部選考委員を招いての選考委員会の結果、第４回ＨＡＬ農業賞神内大賞を有限会社西神楽夢民村が受賞、ほか３団体が各賞を受賞しました。

今年は受賞者を含めた候補者の加工や販売連携による地域の取組みが目立ち、地域連携による新たな流通モデルとして各地域への広がりが期待されます。

外部選考委員

（株）北海道日本ハムファイターズオーナー
大社啓二氏

元北海道副知事・学校法人酪農学園理事長
麻田信二氏

（株）FM北海道取締役放送本部長
中田美智子氏

第1回HAL農業賞神内大賞受賞
株式会社谷口農場代表取締役 谷口威裕氏

設立者 神内 良一



## 農業生産法人有限会社　西神楽夢民村［旭川市］

Agricultural Award

神内大賞

賞金 200万円

代表取締役社長
島秀久氏

### 地域に根ざし、自立した経営戦略を実践

・平成６年に地域農業者が集まって誕生した「夢民村」が、地元農業の活性化と消費者との交流を目的として、平成13年に法人化。農産物販売を手がける「西神楽夢民村」を立ち上げて、米の宅配事業をスタートさせました。現在は約１８０haの農地で米、野菜、ハーブなどを栽培し、そのほとんどを直販しています。

・自社農産物を使った料理を提供するイベントを、「西神楽地域づくりの研究会」と共催で平成10年より継続開催するなど、消費者との交流を図っています。

・地元の酒蔵と協力し、自社生産の酒造好適米「銀風」から純米酒「風のささやき」を製造・販売。全国酒類コンクール２位の成績をおさめ、地域の新たな特産品開発として注目を集めています。

・農村の景観と文化を守る活動、高齢化した農家の収穫作業のサポートのほか、消費者とのさらなる交流を目的とした観光用宿泊施設や新規営農者支援施設づくりを視野に入れて活動しています。

受賞理由

・地域農家9戸が集まり法人化。農産物の生産にとどまらず、自社ブランドの商品を開発し、独自の販売戦略を展開。自立した経営戦略を実践し、高付加価値農業のモデルを構築した。

・昨春、構成員ごとに行っていた販売や農作業を集約し、経営組織を一本化。より地域に密着した強固な農業法人としての地位を確立しており、将来的な農業経営の成長性が期待される。

## 株式会社白糠酪恵舎［白糠町］

Agricultural Award

経営部門 優秀賞

賞金 50万円

代表取締役
井ノ口和良氏

### 地域酪農の新たなモデルを構築

・平成７年頃より、農業改良普及員だった井ノ口和良氏を中心に、収益の向上と乳食文化の醸成を目的としてチーズづくりにチャレンジ。食文化や風土の近いイタリア・ピエモンテのチーズ造りを学び、平成13年、町内若手酪農家（14牧場）を中心として法人を設立しました。

・北海道のチーズ工房は酪農経営の一部門であるのが一般的ですが、白糠酪恵舎は酪農家が株主として共同出資し、井ノ口氏を製造責任者として迎えるという新しいビジネスモデルを構築しました。酪農家は販売・チーズ普及の支援組織「ぐっちーず」を設立し、会報やレシピ本の加工、料理教室やイベントの運営に携わっています。

・販売戦略として釧路地区４つのチーズ工房を組織化し、催事出店における訴求力の向上を果たす取り組みを行っています。

受賞理由

・地域の酪農家（14戸17名）と地元有志3名の出資により法人化。チーズの製造・販売による収益を配当金として還元することで、地域酪農の新たなモデル事業を確立した。

・ホエーを再利用する取り組みによる循環型農業の実践、地域他産業との連携を行い、環境問題を含めた持続可能な地域農業モデルの構築に貢献している。

・釧路地方の4つのチーズ工房（白糠酪恵舎・チーズ工房横井・酪樂館・森高牧場チーズ工房）を組織化したネットワークを設立。外部からの品質評価システム構築の取り組みのほか、催事への共同参加により訴求力の向上を果たしている。

## ＬＬＰ十勝ナチュラルチーズプロダクツ［十勝］

Agricultural Award
経営部門
チャレンジ賞
賞金 20万円

代表
長田正宏氏

・十勝管内のナチュラルチーズ工房５社が、共同でのチーズ販売を目的として設立。十勝ブランドのチーズをまとめて取り扱いたいという要望に応え、催事・物産展への参加やギフト商材の製作などに取り組んでいます。
・既に十勝産チーズ工房としての知名度を確立している５社が集まることで、個性的なチーズが種類豊富に揃う十勝チーズをアピールし、乳製品の消費拡大を図っています。

受賞理由

・「十勝ブランド」の認定を受けた5工房が「JAPANブランド育成支援事業」の対象に選定され、地域全体のブランド機運が盛り上がる中、企業化することで利便性と機動力のある販売システムを構築した。

・今後も合議の上で参加工房を増やしていく予定があること、LLPは5年間という時限組織だが5年目にあたる平成23年以降の明確なビジョンが既にあることなど、将来にわたって成長の可能性を持っている。

## ファームひなたんぼ・有限会社 ひな田屋［当別町］

Agricultural Award
地域貢献賞
賞金 30万円

代表
竹田広和氏
代表取締役
竹田奈緒美氏

・早くから環境問題に着目し、２代目として農業を継いですぐに北海道のエコファーマー認証を取得。その後、有機ＪＡＳの認定、より進んだ環境配慮型の農法であり、道内では珍しい「ふゆみずたんぼ（冬期湛水水田）」農法を取り入れました。ふゆみずたんぼ農法で栽培された米は評価が高く、消費者はもちろん専門家からも高い評価を得ています。

受賞理由

・少ない人手で効率的な収益をあげる仕組みとして、生産部門（ファームひなたんぼ）と加工部門（有限会社ひな田屋）を別法人化。ファームひなたんぼの農産物をひな田屋がほぼ全量買い取り、加工品として付加価値をつけて販売するなどして、通年での収益確保の仕組みを構築した。

## 第４回 HAL農業賞 表彰式

Agricultural Award

平成20年10月8日、札幌市内のホテルニューオータニ札幌において、第４回ＨＡＬ農業賞の表彰式を開催しました。

表彰式では、まずＨＡＬ財団の活動を紹介するＶＴＲを上映し、続いて当財団理事長である磯田憲一より挨拶。第４回を迎えたＨＡＬ農業賞について、「生産から加工・流通・販売まで、トータルな視点を持って産業として見つめ直しチャレンジしている方を応援する賞。成果よりも、農業に取り組む姿勢を評価する賞として北海道に定着していければと思う」と説明しました。

その後、ＶＴＲによる各賞の受賞者の紹介があり、磯田より賞状と副賞が手渡されました。今年は、新たにフェローシップメンバーに加わったＨＡＬ農業賞の受賞者の活動をより詳しくお伝えするため、司会による受賞者にインタビューや、外部審査員による受賞者が製造した菓子やチーズの試食なども行われました。

最後に、大賞を受賞された有限会社西神楽夢民村の島秀久代表取締役社長より受賞者を代表して挨拶があり、「賞をいただいて、地域を見つめて活動してきたことが間違いではないと確信した。今後も新たなる農業にチャレンジしていく」との決意を語りました。

理事長 磯田 憲一

## Reception レセプション

表彰式に引き続いて行われたレセプションには、歴代のＨＡＬ農業賞受賞者をはじめ農業・流通・金融関係者ら約１４０名が参加しました。乾杯に先立ち、ＨＡＬ農業賞の外部審査員である麻田信二氏（元北海道副知事・学校法人酪農学園理事長）は、「第４回となるＨＡＬ農業賞の受賞者は、流通、食文化創造、新しい農法など、これまで受賞された方々とはまた違う、新しい試みをされている。新たなビジネスモデルの誕生を喜びたい」と挨拶。その後、乾杯の発声があり、会場は賑やかに盛り上がりました。

今年もＨＡＬ農業賞受賞者とＨＡＬ共販ネットワーク参加者の生産作物を使った特別料理と加工品が用意され、大賞を受賞した西神楽夢民村の純米酒「風のささやき」や、白糠酪恵舎のイタリアンチーズなどが会場で提供され、人気を集めました。

## HAL農業賞受賞者 Agricultural Award

### 第1回

神内大賞　株式会社 谷口農場

＜経営部門＞
優秀賞　ノースプレインファーム株式会社
優秀賞　農事組合法人 西上経営組合
地域特別賞　株式会社もち米の里ふうれん特産館
チャレンジ賞　有限会社 山崎ワイナリー
チャレンジ賞　有限会社 想いやりファーム

＜指導支援部門＞
株式会社 アグリスクラム北海道

### 第2回

神内大賞　有限会社 無限樹

＜経営部門＞
優秀賞　アオキアグリシステム有限会社
優秀賞　有限会社 十勝しんむら牧場
放牧酪農チャレンジ賞
株式会社あしょろ農産公社
地域直売運営チャレンジ賞
ニセコビューブラザ直売会
酪農イメージアップチャレンジ賞
酪農家集団AB-MOBIT

### 第3回

神内大賞　北海道ホープランド

＜経営部門＞
優秀賞　有限会社 余湖農園
優秀賞　有限会社 夢がいっぱい牧場
チャレンジ賞　有限会社緑有会六輪村
地域特別賞　農事組合法人オーガニック新篠津
地域貢献賞　有限会社 仲野農園

HAL BUSINESS REPORT 1

HALビジネスレポート1

# 有機農産物の海外流通への取り組み

## ■■ 台湾輸出に向け、試験販売 ■■

新篠津村における有機農業の取組みを支援するＨＡＬ財団は、有機農産物の価格優位性の確保と海外流通モデルの検証を目的として、本年９月より株式会社オーガニック新篠津（代表：妙護寺　博文）の有機農産物を中心に台湾へ試験輸出を開始しました。

本年度は大根、玉葱、人参、かぼちゃの４品種を取扱い、来年度以降の本格的な輸出に向けた流通基盤の整備を実施していきます。

有機農産物の輸出にあたっての課題は、①遠距離の輸送時間の短縮と輸送コストの吸収、②個別包装をした際の商品の劣化、③北海道産有機農産物に対する消費者意識の醸成とありますが、太平洋崇光百貨店（台湾国）の連携により課題解決に向けた取組みを行うことを確認しました。

これを受けて、９月25日から試験的に太平洋崇光百貨店台北忠考館Ｂ２食品売り場にて店頭販売を開始。試験輸出および販売ということもあり、初年度の出荷状況は表２の通りとなっていますが、売れ行きは好調で台湾国民の食品に対する安全嗜好がうかがえる結果となりました。

［表1］実験店頭価格

| 品　種 | 店頭価格（台湾ドル） | 換算レート | 生産者売上（日本円） |
|---|---|---|---|
| 大根 | 250$/1本 | 3.31126（9月25日時点） | 1,512円/10kg |
| 玉葱 | 180$/2玉 | | 3,675円/20kg |
| 人参 | 199$/3本 | | 2,520円/10kg |
| 南瓜 | 499$/1玉 | | 2,520円/10kg |

### ＜太平洋崇光百貨店との確認内容＞

1. 台湾における有機農産物の普及に向けて、有機農産物に対する消費者の理解を醸成させるとともに、消費者へ価値の啓蒙と普及促進を図ること
2. 生産者利益を確保するため優位性のある取引価格の設定を行い、売り場において一般野菜と差別化したコーナー作りと商品プロモーションを展開すること
3. 有機農産物の取扱いについては、日本国農林水産省が定める農林物資の規格化及び品質表示の適正化に関する法律（JAS法）に則り、適正に行うこと

［表2］試験輸出出荷状況

| 品　種 | 出荷数量 | | |
|---|---|---|---|
| | 9月16日 | 9月20日 | 10月14日 |
| 大根 | 20kg(24本) | 100kg（120本） | 150kg（180本） |
| 玉葱 | 40kg(140玉) | 60kg(210玉) | 200kg(700玉) |
| 人参 | 20kg(90本) | 60kg（270本） | 100kg(450本) |
| 南瓜 | ― | 100kg(80玉) | ― |
| ミニ南瓜 | 20kg(50玉) | ― | 50kg(150玉) |

［表3］参考（札幌市中央卸売市場市況 平成20年9月25日データ）

| 品　目 | 産　地 | 単　位 | 安　値 | 高　値 |
|---|---|---|---|---|
| 大根 | 道内 | 10kg | 525 | 1,260 |
| 玉葱 | 道内 | 20kg | 525 | 1,680 |
| 人参 | 道内 | 10kg | 315 | 1,365 |
| 南瓜 | 道内 | 10kg | 105 | 1,155 |

## ■■ 有機農業拡大に向け、新篠津村長と合意 ■■

11月12日、当財団の理事長である磯田憲一が、台湾流通実験に参加した新篠津村の農業生産者らとともに新篠津村役場を訪問し、村長の東出輝一氏と会談。東出村長に、有機農産物が台湾において高い評価を受けたこと、来年度の流通に向けて準備が進んでいることなどを説明し、今後の市場開発において「村を挙げて有機農業に取り組んでいる新篠津」というイメージ戦略が重要であることを伝えました。

東出村長は「海外流通を成功させ、最終的には有機農産物に対する高い評価を日本へと逆輸入する」という当財団の構想に共感し、「村民や農協と話し合い、村として有機農業の普及に対してさらに力を尽くしていく」と発言。「有機農業の新篠津村」というイメージの確立を目指すことを約束し、磯田と固い握手を交わしました。

HAL BUSINESS REPORT 2

HALビジネスレポート2

はるや

# 「北海道蕎麦はるや」リニューアルオープン

希少な品種となりつつある「ぽたん蕎麦」の普及実験店として平成18年12月にオープンした「はるや」が、店舗内装やメニューを一新し、9月1日にリニューアルオープンしました。今後は、蕎麦だけにとどまらず広く北海道の食の魅力を紹介できる店を目指します。また、全道の蕎麦産地のリレーなど、さまざまな企画を展開していく予定です。

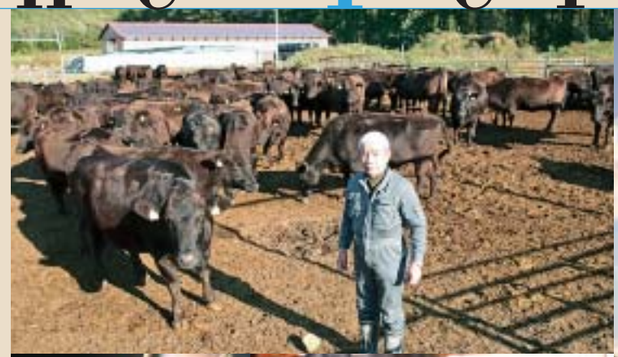
**北海道蕎麦はるや**

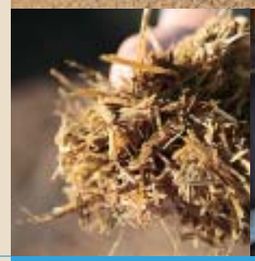
〒105-0021 東京都港区東新橋1-3-5久田ビル1階
TEL／FAX:03-3571-8700
営業時間:11:30～14:00
17:30～22:00（フードL.O 21:15、ドリンクL.O 21:30）
定休日:土・日曜日、祝日
ホームページ:http://www.haruya.jp/index.html

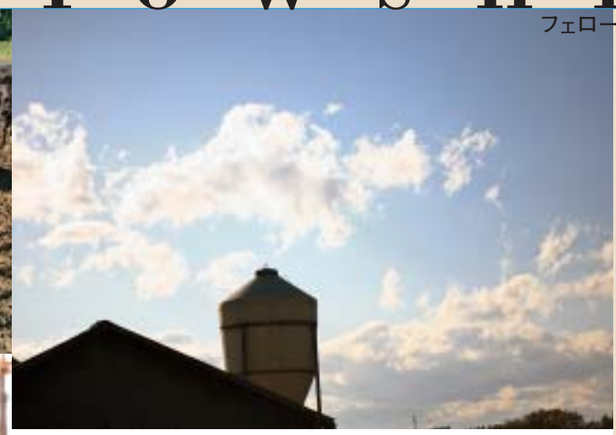
# The Fellowship

フェローシップ

※フェローシップ（fellowship）とは
仲間であること、友情、協力などを意味する言葉。HAL財団では北海道農業に携わる方々とのフェローシップを大切にし、それぞれの経験や事例を共有・意見交換をすることで、北海道農業の発展に貢献したいと考えています。







member's interview VOL.11
メンバーズ・インタビュー

## 安心・安全と「おいしさ」にこだわる商品づくり「生産」を軸に多方面へ事業を展開。

「夢がいっぱい牧場」の代表・片岡氏は、今から37年前、大樹町で農業に新規参入。現在は食肉牛の繁殖と肥育、食肉加工・加工食品の製造、レストラン経営などを行っています。異業種との積極的な関わりや長年に渡る研修生の受け入れなどにより幅広い人脈を築き、独自の発想で新しい商品開発に取り組んできたことに加え、「農業法人としての経営基盤を一代で築き上げたことは、新規参入を希望する次世代に大きな希望を与える」と評価され、第三回HAL農業賞経営部門優秀賞を受賞しました。

有限会社 夢がいっぱい牧場
代表取締役 片岡文洋氏

農業経営モデル紹介

### 単身で来道、牧場経営から異業種へ展開

「夢がいっぱい牧場」では現在、乳用雄牛・黒毛和牛・交雑種あわせて約670頭を飼育し、年間350頭を出荷しています。黒毛和牛については繁殖から肥育までの一貫生産です。

私は高校2年生のときに牧場の写真を見て牛飼いに憧れ、京都大学農学部に進学。卒業後、研修生として大樹町に入り、この地で独立しました。1988年の牛肉の輸入自由化決定をきっかけに、ハンバーグやコロッケなどの加工食品の製造・販売をはじめ、続けて食肉加工を開始しました。1995年に法人化して、1997年には牧場内にレストランをオープン。現在では、このほかに飲食施設「農屋（みのりや）」の共同経営、ヒトデ堆肥の製造・販売も行っています。

### 健康的に育て、熟成で旨みを引き出す

農業は「生産」だけではなく、あらゆる分野につながっており、どこまでを「農業」として考えるかは本人次第。私もまだまだいろんな分野に事業展開できる可能性があると考えています。とはいえ、経営の基本はあくまで「生産」。安心・安全、かつ「おいしいもの」をつくってこそ、その先の展開があります。

当牧場では、肉にサシを入れるためにビタミンAを制限したり、暗所で飼育したり、といったことはしません。明るく風通しのいい牛舎でバランスの取れた食事をさせ、健康的に育てています。さらに、肉は熟成させてから商品化しています。

牛肉は通常、と場で処理されてから店頭に並ぶまで、約5日間。うちの製品は、精肉にする手前の正肉の段階で真空パックし、約40日間寝かせています。これによりタンパク質が乳酸発酵してアミノ酸となり、旨み成分であるグルタミン酸が増えるのです。帯広畜産大学の三上教授の研究によると、その量は5日目の肉の約3倍。食べ比べればはっきりとわかる味の違いがあります。

### 地域とのつながりから生まれた事業

ヒトデ入り牛フン堆肥「天使になった海のギャング」の開発は、大樹町産業クラスター研究会の活動の一環として取り組んだものです。貝類や稚魚を食害し、カニ漁やツブ漁の際に大量に混獲されるオニヒトデは、一般廃棄物となるため多額の処分費用が必要でした。これを牛フン堆肥に混ぜることで分解が可能に。できあがった堆肥はリン酸やカルシウムの吸収がよく、作物の収量が増えるなどの試験結果が出ました。

帯広市内の屋台村に出店した「農屋」は、十勝の農業者4人との共同経営。それぞれの農場の生産物を調理して提供し、消費者との交流を図っています。出店から7年間で収支はトントンですが、アンテナショップとしての効果はとても大きいですよ。うちの商品「ビフトロ丼」は、この店を訪れた芸能人がテレビで紹介してくれたことからブームに火がつきましたし、安心・安全への取り組みやおいしさを知っていただいたことから、商談が生まれたりもしています。

### 日本の農業を守るために「行動」する時

当牧場だけでなく肉牛生産者が抱える共通の悩みとして、資金繰りの問題があります。

例えば和牛は、生後10ヶ月の牛を購入して半年飼育し、人工授精で妊娠させて10ヶ月後に出産、さらに10ヶ月飼育……と、出荷して素牛購入の資金を回収するには2年以上かかります。また、牛が増えれば牛舎や機械も増やさなくてはなりません。さらに当牧場では、農協が資金的に支援できる経営規模を越えはじめた、という問題もあります。近頃は金融機関の農業分野への積極参入がありますが、これは大変にありがたいことです。

輸入食品の安全性が問われ、国内農産物に注目が集まっている今、北海道農業にチャンスが訪れています。しかし、資材・燃料などが高騰する中、チャンスを活かす方法に頭を悩ませている生産者も多いことでしょう。

「国産農産物に国際競争力をつけろ」とはよく言われることですが、資源、燃料、経営面積などの点からも、国際的な舞台で打ち勝つのは大変難しい。そうこうするうちに、日本の農業は壊滅的な状態になってしまうでしょう。日本の農業を守るには、「日本の農産物は高いが安心・安全でおいしい、日本の農業を守るためには関税分を負担するのもやむを得ない」という国民の合意を形成する以外に方法はないのではないか。そのためには、消費者に信頼してもらえる、安心・安全でおいしい農産物を作り続けた上で、「何をするべきか」を農業者が共に考え、行動するときが来ているのだと思います。





**有限会社 夢がいっぱい牧場**

所在地
北海道広尾郡大樹町萌和181

設立
平成13年2月

代表者
片岡文洋

従業員数
10名

売上高
1億4000万円（2007年度）

経営面積
45ha

# 北海道農業法人協会活動報告

## 事業報告

**会員（平成20年10月15日現在）**

◆会員…294法人

◆賛助会員…4法人

◆北海道農業サポータークラブ会員…10法人

・JA三井リース株式会社
・日本ハム株式会社中央研究所
・株式会社北海道銀行
・株式会社テクノ電研
・小柳協同株式会社
・丸善薬品株式会社
・株式会社グローバル社会経済研究所
・日立キャピタル株式会社北海道営業本部
・株式会社北洋銀行
・株式会社セルテ

### 「北海道・東北ブロック農業法人WEEK 2008 in あきた」への参加

・9月4日、5日に秋田県鹿角11市で開催。大塚副会長、堀江副会長、上原理事、村沢理事、事務局の計5名で参加しました。
・東北各県の法人協会役員や事務局などと幅広く懇親を深めました。
・平成21年度は北海道が当番となっており、開催日時、場所、体制について早い動き出しが必要となります。

### 「新・農業人フェア'08」への協力

・9月28日に実施され、本協会からは会員10社がブースを出展しました。
・今年度は、フェアへの協力金を20万円（前回比30万円マイナス）とし、出展した法人に一律1万円を助成しました。
・出展していた農業系大学、高校の就職担当に、8月末時点の求人調査情報を提供しました。

## 顧問就任のお知らせ

11月4日（火）に実施した第4回役員会において、谷口会長から次のお二人への顧問委嘱が提起され、就任が決まりましたので、お知らせします。

磯田 憲一氏［元北海道副知事 （財）北海道農業企業化研究所理事長］

西山 泰正氏［前北海道農政部長 （株）北海道銀行参与］

## 活動予定

**（1）「台湾視察研修旅行」**

実施期間…平成20年11月20日（木）～11月23日（日）の3泊4日

台湾において他店との差別化のアイテムにもなっている北海道産品のブランド化の現状を視察するとともに、地元百貨店バイヤーとの懇談等を通じて、海外流通の可能性を探ります。

**（2）「阿蘇・天草視察研修旅行」**

実施期間…平成20年12月3日（水）～12月5日（金）の2泊3日

北海道の各地域での農地の有効活用アイデアとともに、都市住民を呼び込むことで生まれる新たな業態（食や農村を軸としたライフウェア産業）の可能性を探ります。

# 酪農生産者ネットワーク発足

生乳生産の現場は、今般の原油・飼料・運賃などの生産資材高騰（決算書ベースで平成18年度比20％～30％増）に直面していますが、これを価格に転嫁できず、将来的な明るい兆しも見えず、再生産が持続できない危機的状況にあります。

また、最近ではバター不足が国民生活に大きな影響を与えましたが、これがなぜ発生したのか、今後どうなるのか、消費者の立場からは課題の真相がなかなか見えてきません。

生産者も消費者も、重要な問題に対して無力であり、適切な情報にアプローチできていない状況があります。近年、国内外で食品偽装等が相次いで問題となっていますが、食の安全や流通の仕組み、価格決定プロセス等に対して情報の過疎的状態は早期に解消しなければなりません。

「酪農生産者ネットワーク」は、これらの問題意識に真剣に向き合っていただける関係機関、メーカー、流通事業者等との協議・懇談を進め、私たちが安心して生産し、暮らせるための情報収集や透明化に努めるための組織として発足しました。

### 設立目的

我が国の社会資本である生乳生産の危機に対し、生産者と消費者とが協力し、生乳の流通構造や価格決定のメカニズムに関する情報収集を進め、多様な連携活動を通じ、短期・中期的視野から安全かつ持続可能な生乳供給のあり方を追求する。

### 設立に至る経過

■平成20年6月6日
北海道農業法人協会役員会において酪農部会が発足
■平成20年7月7日
資材高騰を受け、法人協会会員へ農業経営緊急アンケートを実施
■平成20年7月28日
法人協会として北海道消費者協会に連携を申し入れ
■平成20年8月6日
十勝、釧路、根室、網走の各地区の協会役員が世話人となり、北海道酪農生産者ネットワークを設立

### ネットワークの位置づけ

本ネットワークは、北海道農業法人協会酪農部会および北海道農業法人協会政策委員会を世話人とし、各地域の生産者が任意に参加し、生産者、消費者のニーズに柔軟に対応する任意会合とする。

### 組　織

世話人会は、釧路、十勝、根室、網走各地域の法人協会酪農部会員で構成する。事務局は、北海道農業法人協会に置く。

### 会　員

北海道農業法人協会会員および、全道の酪農法人等を対象とする。

### 取組内容

1）関係機関や乳業、流通事業者等との協議・懇談等を通じた協力要請活動
2）有識者、消費者団体、中小食品製造業者等との連携による、流通・価格形成実態等の透明化および評価
3）酪農家の所得向上に向けたあらゆる可能性の追求
4）その他必要な事項への対応

### 生産者連絡会議

取り組み内容の具体的展開に向け、必要に応じ、連絡会議を開催する

### アドバイザリー・ボード

有識者、消費者団体、その他、第三者の立場から客観的な実態把握や評価にご助力・ご協力いただける方を募る。

### 会の期限

本会の期限は1年間とし、継続については別途、連絡会議で協議し決定する。